処方番号：101A　　**処方名**：黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）

処方構成：
桂枝 3-4、生姜 1-2（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、大棗 3-4、芍薬 6、甘草 2-3、黄耆 3-4、膠飴 20（膠飴はなくても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で疲労しやすいものの次の諸症

効能・効果：
虚弱体質、病後の衰弱、ねあせ、湿疹、皮膚のびらん、腹痛、冷え症

原典：金匱要略
出典：

解説：
(1)本方は小建中湯に黄耆を加えたものである。(2)本方を製するには、処方中の植物性生薬全部を一緒に煎じ、滓を去ったのち、膠飴 20 を加え、再び 5 分間煮沸する。温時服用する。

101A. 黄耆建中湯

参考文献名		桂枝	生姜	乾生姜	大棗	芍薬	甘草	黄耆	膠飴
処方分量集		4	4		4	6	2	4	20
診療の実際	注1	4	4		4	6	2	4	−
診療医典		4	4		4	6	2	4	20
応用の実際	注2	3	3		3	6	3	1.5	20
続漢方の本		4	1		4	6	2	4	20
明解処方	注3	4	4	2	4	6	2	4	20
漢方あれこれ		記載なし							
漢方治療百科		4		1	3	6	2.5	2.5	20
症例から学ぶ和漢診療学		−	−	−	−	−	−	−	−

注1 身体虚弱で疲労し易いものの次の諸症：虚弱児童，夜尿症，夜啼症，慢性腹膜炎の軽症，盗汗，腹痛，慢性中耳炎。

注2 虚弱児，大病後の衰弱，痔瘻および諸種の痔疾患，慢性中耳炎，カリエス，慢性潰瘍，その他の化膿性腫物など。

注3 虚弱体質で疲労し易い。腹壁は薄く直腹筋は拘攣している。盗汗，虚弱体質の改善などに用いる。

処方番号：101B　　**処方名**：当帰建中湯（とうきけんちゅうとう）

処方構成：
当帰 4、桂枝 4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、大棗 4、芍薬 5-6、甘草 2、膠飴 20（膠飴はなくても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、疲労しやすく血色のすぐれないものの次の諸症

効能・効果：
月経痛、月経困難症、月経不順、腹痛、下腹部痛、腰痛、痔、脱肛の痛み、病後･術後の体力低下

原典：金匱要略
出典：

解説：
(1)本方は小建中湯の膠飴の代りに当帰を加えたものであるが大虚の時は本方でも膠飴を加える。(2)『金匱要略』には「婦人が産後、衰弱して体力が不足し、腹が刺痛してやまず、呼吸浅表あるいは小腹拘急（下腹がひきつれ）、痛みは腰背に引き、飲食することができないものを治す……弱い人を強壮にする」とある。(3) 腹証は小建中湯の腹証に似て、全体としては腹筋が軟弱で両側の腹直筋が攣急している。

101B.当帰建中湯

参考文献名	当帰	桂枝	生姜	乾生姜	大棗	芍薬	甘草	膠飴
処方分量集	4	4	4		4	5	2	20
応用の実際　注1	4	4	4		4	5	2	
診療医典	4	4	4		4	5	2	
漢方あれこれ	4	4	4		4	5	2	
明解処方	4	4	4		4	5	2	
漢方の本	4	4	−		4	5	2	
漢方治療	4	4	1		3.5	7.5	2.5	
改訂新版漢方処方集	4	3		1	3	6	2	

注1 (1)虚弱な婦人，衰弱した婦人の腹痛に用いる。(2)疲労し易く，貧血ぎみで冷え症，(3)腹痛は下腹が中心で腰，背に及ぶこともある。(4)身体下部の諸出血にもよい。(5)女性の月経前後における頭痛，偏頭痛に用いる。応用としては(1)婦人科諸疾患の腹痛，産後の腹痛，掻爬後の腹膜炎，骨盤腹膜炎，月経困難症で腹痛の激しいもの。(2)痔出血，直腸よりの出血，子宮出血など。(3)男女をとわず下腹や腰の痛み。

処方番号：101C　　**処方名**：帰耆建中湯（きぎけんちゅうとう）

処方構成：
当帰 4、桂枝 4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、大棗 4、芍薬 5-6、甘草 2、黄耆 2-4、膠飴 20（膠飴ほなくても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、疲労しやすいものの次の諸症

効能・効果：
虚弱体質、病後・術後の衰弱、ねあせ、湿疹、皮膚のびらん、化膿性皮膚疾患

原典：普済本事方
出典：瘍科方筌

解説：
(1)『本朝経験方』の一つ華岡青洲家の方である。(2)大虚のときには膠飴を用いる。(3) 黄耆建中湯よりもいっそう体力が低下したために気血のおとろえがさらに強いものに用いる。

101C.帰耆建中湯

参考文献名		当帰	桂枝	生姜	大棗	芍薬	甘草	黄耆	膠飴
処方分量集		4	4	4	4	5	2	2	−
診療医典	注1	4	4	4	4	5	2	2	−
応用の実際	注2	4	4	4	4	5	2	2	−
漢方あれこれ		4	3	2	3	6	3	2	−
厚生省基準黄耆建中湯			3〜4	3〜4	3〜4	6	2〜3	3〜4	20
漢方と民間薬百科		4	4	4	4	5	2	2	
漢方治療百科		3	4	1	3	6	2.5	3	20

注1 虚弱児，大病後の衰弱，痔瘻および諸種の痔疾患，慢性中耳炎，カリエス，慢性潰瘍その他化膿性腫物などに用いる。黄耆建中湯に準じて用いる。

注2 小建中湯に黄耆を加えたものが黄耆建中湯であるから，これに当帰を加えたものとも云える。そこで，本方は黄耆建中湯よりさらに虚証のものに用いる。

処方番号：102　　**処方名**：小柴胡湯（しょうさいことう）

処方構成：
柴胡 4-7、半夏 4-5、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、黄芩 3、大棗 2-3、人参 2-3、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、ときに脇腹（腹）からみぞおちあたりにかけて苦しく、食欲不振で口が苦く、舌に白苔がつくものの次の諸症

効能・効果：
食欲不振、はきけ、胃炎、胃痛、胃腸虚弱、疲労感及び数日を経過したかぜの諸症状

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
別名　三禁湯
胸熱病の代表的な薬方であり、柴胡剤の基本的方剤でもある。用方はみぞおちから脇腹にかけて、肋骨弓下につまった圧迫苦満感をもち、舌には白苔があり、口苦があり、口がねばったり、胃部が痞えて硬く嘔吐感があり、発熱と悪寒が交互に起こるような症状があり、また本方証には潔癖症を呈すものも多く、体質改善の方薬としての性格があり、広い範囲に用いる。別名、三禁湯は、「汗、吐、下の三つを禁ずべき病態である」ところからきたものである。
『方函類聚』に「此方は寒熱往来胸脇苦満黙々不欲飲食嘔吐耳聾が目的」とある。

102.小柴胡湯

参考文献名		柴胡	半夏	生姜	黄芩	大棗	人参	甘草	乾生姜
処方分量集		7	5	4	3	3	3	2	−
診療の実際		7	5	4	3	3	3	2	−
診療医典	注1	7	5	4	3	3	3	2	−
症候別治療		7	5	4	3	3	3	2	−
処方解説	注2	7	5	4	3	3	3	2	(1)
応用の実際	注3	6	5	4	3	3	3	2	−
明解処方		7	5	−	3	3	3	2	2
漢方処方集		8	8	−	3	3	3	3	1
基礎と診療		8	8	3	3	3	3	3	−
診かた治しかた		7	5	4	3	3	3	2	−
実用漢方療法		7	5	4	3	3	3	2	−
漢方入門		8〜6	8〜6	3	3	3	3	3	−
漢方百話		5	3.5	−	2.5	2.5	2.5	1	1

注1 熱のあるものに本方を用いるときは少陽病の熱型である往来寒熱または身熱があって，胸脇苦満のあるものを目標にする。その他に口苦，舌白苔，咽喉乾燥，食欲不振，心煩，悪心，嘔吐などを訴えることもある。熱のない一般雑病に用いるときには，胸脇苦満を目標にする。小児にはとくに本方の適するものが多い。一体に胸脇苦満のある患者は，腹部にある程度の緊張があり，軟弱無力ということはない。もし脈が微弱で，腹力のない場合には，本方を用いないが良い。

注2 本方の証は，表の邪はすでに解消し，病が少陽の部位，すなわち半表(外)半裏に進み，いわゆる胸脇苦満の症状を現わしたときに，これを目標として用いる。少陽の部位は，横膈膜を中心に，気管支，肋膜，腹膜，肝胆，胃などにあり，胸脇苦満というのは，季肋部を中心に肋骨弓の上下の部分，および脇肋の皮膚，筋肉，皮下組織等に炎症と緊張異状をきたし，胸内が一杯につまったような苦満感を訴え，肋骨弓下部を圧迫すれば，抵抗と圧痛を証明するものである。この現象はこれらの場所に内熱によって腫脹硬結が起こり，胸壁におけるリンパ腺にも腫脹と硬結を生じたことによるものである。その他脈は沈弦で，食欲不振，口苦，舌白苔，嘔吐，往来寒熱，心下悸，頸項こわばり，耳聾等を目標とする。また肝胆の経絡にしたがい，頸項部より陰部疾患にまで及んでいる。体質的に用いるときは，必ずしも往来寒熱や嘔吐などなくともよいのである。胸脇苦満の証がそれほど顕著でなくとも用いてよいことがある。

注3 (1) 熱が出て5，6日たってから，往来寒熱，胸脇苦満がおこり，舌に白苔を生じて口が苦く，食欲不振，悪心，嘔吐のあるもので，このとき咳のでることがあり，あるいは口渇，腹痛，心悸亢進，尿利減少，身熱，頸や項のこりなどがおこり，あるいは便秘，あるいは軟便などになることがある。(2) 熱病にかかって10日以上たち，胸満や胸痛，心悸亢進，尿利減少，身熱，頸や項のこりなどが起こり，あるいは便秘，あるいは軟便などになることがある。(3) 産褥熱や炎症性疾患にかかって，四肢が煩熱して頭痛がおきるもの。(4) 腹が急に痛んで，小建中湯が効かず，脈は軽く按じて渋，強く按じて弦のもの。(5) 黄疸で，熱が出てさむけがし，胸脇苦満があり，食事がとれず，頸や項がこり，小便の出が悪く，脈が浮弱遅のもの。(6) 以上のほか，腹証に胸脇苦満のある，虚実中等の人の雑病諸症に用いる。

処方番号：102A　　**処方名**：小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせっこう）

処方構成：
柴胡 4-7、半夏 4-7、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、生姜 4、黄芩 3、大棗 2-3、人参 2-3、甘草 2、桔梗 3、石膏 10

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、ときに脇腹（腹）からみぞおちあたりにかけて苦しく、食欲不振で口が苦く、舌に白苔がつき、のどがはれて痛むものの次の諸症

効能・効果：
のどの痛み、扁桃炎、扁桃周囲炎

原典：皇漢医学
出典：

解説：
小柴胡湯証で、耳鼻科、咽喉科、呼吸器科の領域に広く応用される。小柴胡湯方に桔梗と石膏を加味した方剤であるから、さらに口渇と皮膚粘膜の炎症が強く、痰や膿が出る症状に用いる。耳下腺炎、頸部リンパ腺炎、蓄膿症、扁桃腺炎、扁桃周囲炎、風邪の後期の症状で膿痰の出るときなどに応用される。目標は脉沈弦、食欲不振、口苦、舌白苔、嘔吐、往来寒熱、心下悸、頸項のこわばり、耳聾など少陽証を示すもの。

102A.小柴胡湯加桔梗石膏

参考文献名	柴胡	半夏	生姜	黄芩	大棗	人参	甘草	桔梗	石膏	用法・用量
診療の実際　注1	7	5	4	3	3	3	2	3	10	
診療医典	7	5	4	3	3	3	2	3	10	
漢方医学	7	5	4	3	3	3	2	3	10	
処方解説	7	5	4	3	3	3	2			*1
薬局漢方製剤194方の使い方	−	−	−	−	−	−	−	−	−	

*1　水600ccをもって煮て350ccとし、滓を去り、再び薬液だけを火にかけ、煎じつめて200ccとし、3回に分服する。乾生姜のときは1gを使用。

注1　耳下腺が腫張し，38°前後の熱が弛張するとき，舌に白苔があり，多少とも胸脇苦満の症に解熱するまで継続すれば多くは治癒し，合併症を防ぎ得る。急性穿孔性中耳炎で発病後２～３日経過し，悪寒，発熱があって，口苦く，白苔があり，耳痛，難聴，膿汁の出るもので，煩悶口渇を訴えるもの。また一般アデノイドの症候が備わり，胸脇苦満を認め，頸部リンパ腺が腫脹し，神経過敏の傾向のあるもの。

処方番号：102B　　**処方名**：柴蘇飲（さいそいん）

処方構成：
柴胡5、半夏5、黄芩3、人参3、大棗3、香附子4、蘇葉1.5-3、甘草1.5、陳皮2、生姜1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、胸脇苦満を認め、やや神経質で気鬱傾向を認める者の次の諸症

効能・効果：
耳鳴り、耳閉感

原典：本朝経験方
出典：勿誤薬室方函

解説：
『浅田方函口訣』に「傷寒後の耳漏を治す。すなわち小柴胡湯、香蘇散の合方」との記載があり口訣として「この方小柴胡湯の証にして鬱滞を兼ぬる者に用ゆ。耳漏を治するも、少陽の余邪鬱滞して解せざるが故なり。その他、邪氣表裏の間に鬱滞する者に活用すべし。」と述べている。

少陽の余邪鬱滞して解せざる云々との記載があるが、少陽の邪氣が鬱滞して起きる耳漏すなわち繰り返す慢性中耳炎が正面の目標である。或いは感冒で耳閉感を伴うとき或いは感冒から中耳炎を併発したときなどに適用する。

本処方の目標で重要なポイントは自覚症状で耳が塞がったように感じるという耳閉感である。炎症が強度で耳の疼痛を訴えるときは桔梗石膏などを加えて用いる。

『方読便覧』に「暴（にわか）に耳漏して頭鬱冒する者小柴胡湯合香蘇散、百発百中なり。」と記載されているが、突発性難聴の治療にも応用可能な処方である。

102B.柴蘇飲

参考文献名		柴胡	半夏	黄芩	人参	大棗	香附子	紫蘇葉	甘草	陳皮	乾生姜	生姜	用法・用量
続漢方あれこれ	注1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−		
実用漢方処方集	注2	5	5	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1		
黙堂柴田良治処方集	注3	5	5	3	3	3	4	3	1.5	2		1	

注1
中耳炎
耳鳴り

注2
応用　耳聾

注3
適応　中耳炎　耳管閉塞　耳聾　耳鳴り　発熱後の耳鳴り

処方番号：102C　　**処方名**：柴陥湯（さいかんとう）

処方構成：
柴胡 5-7、半夏 5、黄芩 3、大棗 3、人参 2-3、甘草 1.5-2、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、栝楼仁 3、黄連 1.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、ときに脇腹（腹）からみぞおちあたりにかけて苦しく、食欲不振で口が苦く、舌に白苔がつき、強いせきが出てたんが切れにくく、ときに胸痛があるものの次の諸症

効能・効果：
せき、胸痛、気管支炎

原典：医学入門
出典：

解説：
乾性肋膜炎の必効の名薬とされている。いわゆる胸痛の方である。本方は小柴胡湯と小陥胸湯の合方であり、目標は胸中に熱邪が胃部には湿毒が共存するもので症状は胃部季肋部に抵抗圧痛を有し、痰を吐し咳嗽し、胸痛するもの、小柴胡湯に用法は変わらず、本方は胸部に疼痛を訴えるものに用いる。
『方函類聚』に「小柴胡湯、小陥胸湯合方上焦熱盛痰咳者加竹茹。或加竹茹鼈甲或加杏仁麦門冬。治胸痛一等甚しきは大陥胸湯なれども大抵此の方にて防げる也」とある。

102C.柴陥湯

参考文献名		柴胡	半夏	黄芩	大棗	人参	甘草	生姜	括楼仁	乾生姜	黄連
処方分量集		5	5	3	3	2	1.5	3	3	−	1.5
診療の実際		5	5	3	3	2	1.5	3	3	−	1.5
診療医典	注1	5	5	3	3	2	1.5	3	3	−	1.5
症候別治療		7	5	3	3	3	2	4	3	−	1.5
処方解説	注2	7	5	3	3	3	2	4	3	−	1.5
応用の実際	注3	6	5	3	3	3	2	4	3	−	1.5
明解処方		5	5	3	3	2	1.5	−	3	1.5	1.5
漢方処方集		8	8	3	3	3	3	−	3	1	1
実用漢方療法		5	5	3	3	2	1.5	3	3	−	1.5
基礎と診療		6〜8	8	3	3	3	−	3	3	−	1

注1 心下部が特に硬くふくれて，この部に圧痛があるものを目標に……。強いせきが出て，痰が切れにくく，せきのたびに，胸にひびいて痛むものにもちいる。

注2 小柴胡湯の証と小陥胸湯の証とが合せ存するものに用いる。浅田家では肋膜炎にはほとんど柴陥湯として用いている。

勿誤方函口訣には「誤下ノ後，邪気虚ニ夾ジテ心下ニ聚リ，ソノ邪ノ心下ニ聚ルニツケテ，胸中ノ熱邪ガイヨイヨ心下ノ水ト併結スル者ヲ治ス。馬脾風ノ初起ニ竹筎ヲ加エ，痰咳ノ胸痛ニ運用スベシ」とある。

注3 小柴胡湯の証に準じ，咳がひどく，かつ胸が痛むものに用いる。小柴胡湯と小陥胸湯の合方で，小柴胡湯単独より，消炎鎮痛の力がある。胸脇部の充満感，圧迫感と，咳がでるときや呼吸を深くしたとき胸が痛み，痰が切れにくいなどを特徴とする。

処方番号：102D　　**処方名**：清肌安蛔湯（せいきあんかいとう）

処方構成：
柴胡 4-7、半夏 4-5、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、人参 2-3、黄芩 3、甘草 2、海人草 3、麦門冬 3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、ときに脇腹（腹）からみぞおちあたりにかけて苦しく、食欲不振で口が苦く、舌に白苔がつくものの次の症状

効能・効果：
蛔虫の駆除

原典：蔓難録
出典：

解説：
小柴胡湯の大棗を去り、海人草（鷓鴣菜）、麦門冬を加えたものである。小柴胡湯の夕方の熱に対し、午前中に熱をみとめる。

102D.清肌安蛔湯

参考文献名	柴胡	半夏	生姜	人参	黄芩	甘草	海人草	麦門冬
診療医典	7	5	4	3	3	2	3	3
処方集　注1	6	6	3	3	3	2	3	3
診療の実際	7	5	4	3	3	2	3	3
処方分量集	7	5	4	3	3	2	3	3

注1　蛔虫で寒熱往来し皮膚枯燥，マラリヤに似て労の如きもの。小児蛔虫のため寒熱を発するもの。

処方番号：103　　**処方名**：小承気湯（しょうじょうきとう）

処方構成：
大黄 2-4、枳実 2-4、厚朴 2-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以上で、腹部が張って膨満し、ときに発熱するものの次の症状

効能・効果：
便秘

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
(1)処方構成は大黄 4 両、枳実 3 枚、厚朴 2 両となっている。(2)承気は順気の意で、気のめぐりをよくすることであり、これによって腹満、便秘を治すのである。厚朴、枳実は腹部の緊満を治し、大黄は消炎、瀉下の効がある。(3)本方は実証の患者に用いる処方で、頑丈な体質で臍を中心にして腹が全般的に膨満して弾力があり、脈にも力があるし、便秘するものに用いる。
＜使用上の注意＞(1)本方は腹満、便秘のものであっても脈弱のものには禁忌である。例えば腹満であっても腹水、腹膜炎などの場合は不可である。(2)本方は大承気湯から芒硝を去った方剤で、大承気湯よりも症状の軽微なものに用いる。

103.小承気湯

参考文献名		大黄	枳実	厚朴
処方分量集		2	2	3
診療医典	注1	2	2	3
応用の実際	注2	2	2	3
診療の実際		2	2	3
漢方あれこれ		記載なし		

注1 本方は急性肺炎，腸チフスなどの経過中に頓服させることがあり，肥胖症，高血圧症，常習便秘，食傷などに用いられる。

注2 この方は胃の中の停滞物を緩和に下すということであるが実際には胃に限らず腸内の停滞物を下す効果もある。高血圧症，肥胖症，便秘症，食中毒，急性肺炎，その他の熱病などにも用いる。

処方番号：104　　**処方名**：小青竜湯（しょうせいりゅうとう）

処方構成：
麻黄 2-3、芍薬 2-3、乾姜 2-3、甘草 2-3、桂枝 2-3、細辛 2-3、五味子 1.5-3、半夏 3-6

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、うすい水様のたんを伴うせきや鼻水が出るものの次の諸症

効能・効果：
気管支炎、気管支ぜんそく、鼻炎、アレルギー性鼻炎、むくみ、感冒、花粉症

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
この方は麻黄湯の変方で、表に邪があり心下に水毒のあるものに用い、麻黄が主薬である。咳は湿った咳で、ぜいぜい、ぜこぜこ、ひゅうひゅうのごとき喘鳴を伴うものが普通で決して空咳のことはない。痰は唾のように薄くて量が多い傾向があり、非常に濃い痰や膿性の痰には本方は向かない。またやせて貧血があり腹部軟弱で食欲がなく、手足が冷えて脈の微弱なものには本方を用いないほうがよい。

104.小青竜湯

参考文献名		麻黄	芍薬	乾姜	甘草	桂枝	細辛	五味子	半夏	生姜	乾生姜	用法・用量
処方分量集		3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
診療の実際	注1	3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
診療医典	注2	3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
症候別治療		3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
処方解説	注3	3	3	−	3	3	3	1.5	6	−	1.5	*1
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話	注4	3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
応用の実際	注5	3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
明解処方		3	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
漢方大医典		2	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
東洋医学概論		2	3	3	3	3	3	3	6	−	−	
日本薬局方		2	2	−	2	2	2	3	3	2	−	
皇漢医学		3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	1	7	−	−	
漢方医学の基礎と診療		3	3	3	3	3	3	3	8	−	−	

*1 麻黄だけを先に煮て、上沫(浮き上がったカス)を去り、他の薬を入れて再び煎じるのがたてまえである。一般にはそのまま同時に煎じている。

注1 感冒によって持病的に起こる喘息性の咳嗽。急性の浮腫，喘息性の気管支炎，気管支喘息，百日咳，肺炎，湿性胸膜炎，ネフローゼ，急性腎炎，関節炎，結膜炎等。

注2 気管支炎，気管支喘息，百日咳，肺炎，アレルギー性鼻炎，関節炎，結膜炎などに用いられ，ネフローゼ，腎炎などの発病初期の浮腫に用いることがある。

注3 本方は発熱と喘咳を主とする。感冒，流行性感冒，気管支炎，肺炎，熱はなく水気上衝による気管支喘息，百日咳。水気が体表にあふれる急性慢性腎炎，ネフローゼ，結膜炎，湿疹，浮腫，関節炎で水がたまったもの。心下の水気である胃酸過多症，生唾過多症，また肥厚性鼻炎，アレルギー性鼻炎，くしゃみ頻発症など。

注4 発表の剤を用いて数日の後，未だ表証が去らず，心下に水毒があって気管支炎を起こし，喘鳴を伴い咳嗽，呼吸困難を訴え，多く泡沫水様の痰を喀出するもの。肺炎を併発したときにもよいし，感冒のたびに喘息発作を起こすものにも用いられる。

注5 気管支喘息，小児の喘息性気管支炎，感冒，肺炎，百日咳，麻疹，急性腎炎，ネフローゼ，関節炎など。

注6 必須目標は表症（発熱，悪寒，頭痛，無汗，乾嘔など）と水症（うすい痰，鼻汁，涎沫，小便多量，夜尿症，浮腫，喘嗽)。小児喘息，百日咳，急性腎炎(浮腫)，湿疹，急性結膜炎。